



本年6月12日から28日まで、ヨーロッパ3カ国を巡る海外出張へ行ってきた。最初に向かったのはポルトガルで、ヨーロッパ・エコロジカル経済学会大会がポルトガルの首都リスボンで開かれ、我々もこの大会に参加し学会報告を行ってきた。

今回の演題は北海道農業の持続可能な発展に関するもので、農業の持続可能な発展を考える上で重要な経済的側面、環境負荷の低減、多面的機能の増進について、環境会計手法を用いて総合的に考えると、北海道農業は持続可能なのかというものだった。報告後の質疑応答では、多面的機能で環境負荷を相殺する考え方や農家家計の消費活動をどう取り扱うかについて質問が寄せられた。

ところで、初日、学会参加登録の受付を済ませると、開会式の会場までは「ウォーキング・バス」というもので行くとの話だった。私たちはてっきりシャトルバスが会場まで運行されると思っていたのだが、なんと「Walking Bus」と書かれた手製のプラカードを掲げた学生が、徒歩で先導して参加者を会場まで連れて行くという洒落っ気たっぷりの「バス」だったのである。環境問題について議論する学会だけあって、このような側面でも環境への配慮が感じられた。

ヨーロッパの西端ポルトガルでの数日間の滞在の後、北欧スウェーデンへ向かい、首都ストックホルムでストックホルム経済大学のスタッフと農業および環境に関する意見交換会を行った。この意見交換会は、今回の出張のリーダーである出村克彦教授（北海道大学

大学院）の意向で実現したものである。意見交換会では、北海道と気候的に似ているスウェーデンの農業の概要や環境配慮への取組などについて説明を受けた後、当方からも日本における農業環境政策などを説明し議論を行った。意見交換会では農業および環境に関する議論のみならず、確率論など統計学的手法についても実証的な研究事例が紹介され、私たちは大いに興味を抱いたのだった。

日本出発から10日目にして本出張の最終目的地であるサンクトペテルブルグ（ロシア）に到着した。見慣れないキリル文字と笑顔のない入国管理官に出迎えられ、はじめてロシアに入国したことを実感した。サンクトペテルブルグ訪問の目的は、環境経済学と環境会計に関する資料収集およびロシア・エコロジカル経済学会（開催日6月23日～26日）での学会報告である。学会のメイン会場は、ロシア最古の大学である国立サンクトペテルブルグ大学であった。ロシア最古の大学だけあり、多くの資料を収集することができた。

また、もう一つの目的である学会報告に関しては、色々と驚くことが多かった。私たちのいたセクションだけが特別なのか、白熱する国民性なのかはわからないが、報告者が報告中であるにも関わらず質問し、フロア内で議論するなど珍しい一幕もあった。私たちの報告の時にもそうならないよう祈りつつ、私たちはOECDの持続可能性指標の問題点を改善した新たな持続可能性指標の開発に関する報告を行った。今回のロシア・エコロジカル経済学会のテーマが、“持続可能な発展のためのグローバリゼーション、ニューエコノミー、環境とは何か”を問うものであったせいか、終始問題なく報告を終えることができた。

最後に、ロシアの学会に参加して私たちが感じたことであるが、昨年ロシアは京都議定書に批准するなど環境問題に取り組む姿勢を見せ始めている。本学会でも環境に対する関心の高さを感じさせられた。しかしその反面、いかに排出権取引などを利用して国益を生み出すか、そういったアプローチを海外の研究者に求めているようにも感じられた。